# 箕島二千年史

小林定市

## はじめに

箕島町は、福山城の南方約六Kmに位置し、東にNKK福山工場、南は瀬戸内海と鞆町、西は芦田川を介して水呑町に接する町で、江戸時代は水呑村に属し、島の周囲は約四七〇〇mであった。

芦田川より吐出された土砂が堆積して新開が増大したことから、福山市街地と陸続きとなり、島の周辺部は干拓が進み、埋立用土石の採取で山容は変形し、工業団地・宅地造成も進み、従来島の人々が漁場としてきた新涯町・鋼管町・箕沖町は臨海工業地帯となり、都市型産業は日々増している。

しかし、戦前迄は白砂青松の海岸で素晴しかった風景と、魚の宝庫であった海は破壊され、再び旧観を取戻すことはできないであろう。

## 弥生・古墳時代

箕島に何時頃から人が住み始めたのか定かでないが、縄文時代以前に人々が住んでいた痕跡は、まだ発見されていない。しかし、弥生時代になると、朝鮮半島より伝来したであろうと考えられている、弥生時代前期末の細形銅剣（軸部が折損、長一一・五cm）が出土している。

また、水呑町から熊ケ峰の山頂を越え、山を下った熊野町の熊野神社の裏山からは中期中頃以後の平形鋼剣（全長四五cm）二本が出土している。

古墳時代になると、箕島には多くの古墳の築造がみられ、茶山の古墳群は一五基を数え、その中の主墳（釜屋一号墳）から、明治四十三年（一九一〇）に発見された市重文の金銅製単龍環状柄頭（たんりゅうかんじょうつかがしら）は、六世紀後半頃の作と推定されているものである。環頭の起源は中国で、龍は中国の戦国時代に、四方の守り神として生れた空想上の動物であって、環状柄頭の龍の装飾は、今にも天に昇るかのように雄々しいもので、環状の部分は龍の胴体を表現したものである。

戦前、箕島町の人による埋蔵文化財の調査と、その他の諸記録を総合すると、次のようになる。

1. 弥生時代・福禅寺谷、出土品細形銅剣。
2. 〃　・福禅寺谷西、石棺・副葬品。1、鉄刀。2、石斧。
3. 古墳時代・五八mの茶山の主墳（一号墳）横穴式石室・高サ直径七尺

石室の間口・奥行三間、副葬品1、金銅製単龍環状柄頭。2、須恵器。3、勾玉。4、鉄刀（金錆）。

4.古墳時代・古墳。福禅寺西、石室間口・高サ共六尺、奥行七尺。副葬品鉄刀。

5. 〃 ・古墳。釣ケ端、石室間口一間、高サ四尺、奥行一間、副葬品。1、須恵器十二ケ。2、鉄刀。

6. 〃 ・古墳。巣の脇、位置不詳。（古老の話）

7. 〃 ・貝塚。釜屋東斜面の海岸、遺物須恵器。

8.時代不祥・釈迦の端、大正九年頃石棺を発堀。遺物。1、人骨。2、（弥生古墳）鉄刀。その後石塚を造り石棺を祀る。

9. 〃 ・阿伽、石棺。明治四十年頃石棺を堀り出す、以後不明。

古墳時代から江戸時代迄の、箕島地方での推移を示す史料は、まだ明らかにされていない。

## 長和庄と平教経陣屋伝説

田尻町の北半分に、本郷の地名が残されていたのであるが、本郷とは、沼隈半島東南部で最初に開け、付近の発展の源と土地に付けられる地名であることから、古墳が多く残されていた田尻町北部と箕島町は、古墳時代以後も引続いて繁栄したようである。

箕島は、長和庄内に含まれていたものと考えられるが、長和庄の領家悲田院は、天正元年（一五七三）、織田信長の京都上京焼打で焼失し、長和庄東方地頭の田総庄長井氏にも長和庄支配文書が残されていないことから、水呑・箕島・田尻の中世の解明は進んでいない。

藤原北家正三位葉室顕頼は、保延の頃（一一三八～一一四〇）興善院を建立し、第七四代鳥羽天皇ゆかりの御願寺安楽寿院に寄進している。顕頼の二男、藤原惟方（これかた）（当時勘解由次官）と、惟方の姉で藤原季成の妻であった民部卿三位局は、仁平元年（一一五一）に一七ケ所の所領を興善院に寄進している。この一七ケ所の所領群の中に長和庄が含まれていたことから、長和庄が成立するのは仁平元年のことである。

鳥羽天皇の第四王子である、第七七代後白河天皇に、第一王子の二條天皇が誕生したのが康治二年（一一四三）で、同年に顕頼は三ケ所の所領している。

次いで、民部卿三位局の娘、藤原成子と後白河天皇との間に第二王子である、以仁王（八條院の猶子）が誕生したのが、一七ケ所の所領が寄進されたと同じ仁平である。この康治二年・仁平元年と二度に亘る興善院への所領の寄進は、何れも、後白河天皇の王子誕生年と一致することから、王子誕生を祝って行われた所領寄進であったと考えられる。

葉室藤原氏が所領を寄進した狙いは、引続いて貴族として権力を保持するための方策だったようで、以後、長和庄は八條院領として伝領され、歓喜光院領に寄進替されたのは徳治元年（一三〇六）のことで、延慶元年（一三〇八）閏八月、後宇多法皇は所領（長和庄を含）を東宮尊治親王（第九六代・後醍醐天皇）に譲与されるが、南北朝時代、南朝方が弱

体化したことで、歓喜光院領は失われて行くのである。

長和庄に地頭が設置されるのは、後鳥羽上皇が、北条氏追討の宣旨を全国に下した承久の乱（一二二一）後の出来ごとで、長和庄の庄官は、後鳥羽上皇方に味方し、討幕の企に参加したことで、乱後所領は幕府に没収され、戦功のあった御家人、長井時広に地頭職が与えられたようである。また、長和庄地頭職が東西に分割されるのは、蒙古襲来の前年文永十年（一二七三）のことで、幕府が蒙古の来襲に備え、応戦の準備をしていた時期であることから、幕府の鎮西・長門防備に関連して、長井氏も後方の拠点作りの分割と考えられる。

「平教経の陣屋が箕島にあった」との通説が伝えられているが、もし、事実であるとすると、長和庄は平氏の所領であったことになる。

平氏の没落に際して、平家一門の所領や、平家与党人・謀叛人の所領は「平家没官領」と称して、鎌倉幕府に敵対した所領として、源頼朝は戦功のあった御家人に地頭職の名目で分与し、敵対者の土地を支配している。当時、長和庄は八条院関係領で、八条院の猶子、以仁王は治承四年（一一八〇）、源頼政に奉じられて平氏討滅の謀主となり、令旨を出す。すると、源行家は以仁王の令旨を東国の源氏に伝えるため八条院領を中心に動いていることから、長和庄は源氏系であって、断じて平氏関係の庄園でなかった筈である。

寿永三年（一一八四）二月七日、源義経が一の谷の合戦で平家を破ると、源頼朝は、十一日後の二月十八日に土肥実平を、備前・備中・備後の守護に補任する。翌三月二十五日には、実平は備中の国府で在庁の所務をとっていることから、同日頃には備後でも実平は、備中同様支配権を保持したものと考えられる。

『平家物語』の「六ケ度合戦」では、僅か十日間程の間に、平教経は西国各地で六回も戦って勝ったことになっているが、これはありえないことで、六回の戦闘を一つの時期に集めて書き全て教経の功績としたようで、実際に戦があったのは寿永三年七月ごろ、平氏が安芸国で土肥実平を相手に六回戦っている。

以上のことから平教経の軍勢が、屋島から箕島に押寄てみたものゝ、備後は源氏によって固められていたことから、備後での戦を中止し、安芸国沼田庄に転戦したと読むのが、物語の正確な読み方と思う。

## 水野勝成の築城計画と福山城

戦国時代が終り、豊臣家から徳川氏に天下は移り、関ケ原合戦後、芸備両国に福島正則が封ぜられるが、広島城修復の件で正則は改易となり、代って、大和郡山から水野勝成が備後南部一〇万石の領主として入部する。勝成は早速新城の適地を三ケ所に絞り、第一候補地に水陸の軍事的要地箕島、第二候補地に野上村常興寺山として幕府の裁可を仰ぐ、勝成の計画は、大手を南部（水ケ浦のあたり）とし、本丸を中央の高所に、搦手は（釣ケ端新涯のあたり）埋立工事によって城下町を構成する計画であった。

幕府からは係官が出張吟味の末、「箕島は規模宏大なため、経営は容

易ならず」として不許可となったのである。その結果第二候補地の常興寺山の新城建設が確定し、築城は幕府の監督のもとに進められ、幕府は絵図面師として小幡勘兵衛、石垣奉行に花房志摩守と戸川土佐守を派遣している。また、幕府からの援助として、伏見城の遺構が下賜される。

従来、福山城に下賜された伏見城についての通説は、「文禄年間に、大閤秀吉の居城として築かれ、桃山文化の粋を集めた城」であったが、通説は疑問で、伏見城は文禄元年（一五九二）から、東山連峰の最南端指月の地に築城が進められた。ところが慶長元年（一五九六）閏七月十三日の京幾大地震で指月の城は崩壊し城中での死者は五〇〇人を教え、周辺の大名屋敷もほとんど倒壊したのである。

秀吉は早速城の再建に着手するのであるが、今度は場所を変え、指月より東北寄りの小幡山（伏見山）に慶長三年春完成。同年八月秀吉の死後は子頼秀が在城するが、翌年には徳川家康が入る。慶長五年関ヶ原合戦の勃発に伴い、家康の家臣が守る同城を西軍四方の大軍が猛攻し、激戦の後、同年七月三十日夜同城は、本丸・松之丸・名護屋丸・二之丸以下悉く焼失（『言経卿記』『時慶卿記』『左大史孝亮記』）して陥落した。戦に勝利した家康は、伏見城をそのまゝ放置せず、翌慶長六年、小堀政次を作事奉行に任じ再建に取りかかり、次いで、普請奉行に藤堂高虎を任命、大工棟梁中井正清も作事を指揮し、同年末には大規模な修復がなされ、慶長八年二月十二日、同城で家康の征夷大将軍の宣下式が行われた。

元和五年（一六一九）西国支配の拠点が大坂城と定まり、大坂城大修

箕島の初日の出（平成5年1月1日）

築が決定したことで、従来からの西国支配拠点であった伏見城は不要な城となったことで取壊され、本丸御殿は二条城に、隅櫓は大阪城・淀城・江戸城などに移される。

初代・二代と続いて将軍宣下式が取行われ、徳川幕府の権威の象徴であった伏見城は、二代将軍秀忠の命により、城郭の一部が福山城に移築され、幕府拝領の建造物群は福山城の南面大手門後方上の本丸に、東から月見櫓・湯殿（葵紋有）・本丸御殿（箱棟に葵紋有）鉄御門・伏見三階櫓の偉観が立並ぶのである。

## 箕島の山

村民の狩猟と伐木を禁止した領主の山を御立山と呼び、箕島の御立山は、一七二町八反（十八丁・八丁）薮一反（二〇間・十五間）があって山番の給米として米三石がされていた。そのため楠等の大木が茂っていて大木の下にはしだが繁茂していたようで、水野勝俊は正保四年（一六四七）五月、深津沖新涯築堤の潮止工事に「箕島の羊歯」を用いるよう命じている。

土手を築堤する際、干潟の軟泥の上に直接土砂を投入する工法では、軟泥は四散し土砂が埋没して効果が挙がらないことから、軟泥の上に羊歯を敷詰めその上に盛土をする工事のようで、特に潮止ともなると工事は難かしく大量の土砂を単時間に、軟弱な地盤に盛土する際は有効であった。

元禄十一年（一六九八）五月、水野家は継嗣断絶となったことから改易となった節、箕島の楠の大木や其の他の用木を、屋吹伝右衛門と三河屋勘蔵等が伐採して売却したことで両人は召捕えられている。

## 釈迦ケ端

福山城下西町（現在の霞町）に、寺格が水野家の賢忠寺に次ぐ大淵山泉龍寺と称す曹洞宗の寺がある。

福山での開基は寛永七年（一六三〇）で、家老の中山将監重盛が願主となり、水野家の縁戚旅鶯翁和尚が中山将監の請により同寺を建立する。三代水野勝貞（明暦から万治の頃）は旅鶯翁に帰依し、毎夜の如く呼出しては話を聴いていたが、或る干魃の年、勝貞が「禅宗にも雨乞いの法あらば行え」と命じると、旅鶯翁は海の難所箕島釈迦ケ端岸下の前方二〇間先にあった潜岩（平俎・一之俎・長瀬俎の三ケ所の暗礁）の上に結跏趺座して祈る。そのうち潮が次第に満ち唇に達しそうになった時、空は暗天となり落雷を伴った豪雨となった。以後勝貞は益々帰依を深めていくのである。

旅鶯翁の後住太白和尚と中山将監重盛の孫将監重澄・外の人が請を結んで、寛文九年（一六六九）春、釈迦ケ端に釈迦の石仏を造立し、以後は、正・五・九月に般若経の転読が行われるようになるが、この転読が縁となり同地に、泉龍寺支配の金剛山般若院という庵室ができる。嘉永の頃（一八四八―五三）寺社奉行に出された願書には次のように記されている。

恐れ乍ら書付を以て願上奉り候御事。
水呑村箕島の内釈迦ヶ端と申す処に、水野様御代に御家中並びに町場より、護穀成就並びに破船除けの為、釈迦の尊像を石仏にて御建立なされ、金剛山般若院と申す庵室を右の場所に御建立、御林の内四町（四三六m）四方を御添えなされ、当寺の支配に仰付けられ候。
毎年二月十五日に御祈祷仕り候事に御座候。

近世初頭になると、福山湾内は、芦田川から流出した土砂が堆積し、次第に遠浅の海が拡がり、城下船入へ入港する大型帆船の航路が制限されて行く時期であった。
福山湾口の浅瀬の中に潮の干満時に潮が早く流れる底深い水路（澪筋）が箕島沖から福山船入に通じていた。釈迦ヶ端は丁度この澪筋に当り、干潮時に海上に頭を出していた潜岩も、満潮になると海中に没し魔の海難場所に変ることから事故防止のため、領主の大型船出入に際しては、水呑村は番船を出して暗礁の位置を知らせて安全を計っていた。
白石島沖に領主の船が帰って来ると、釈迦ヶ端に遠見番を置き、先触れの船が帰ってくると烽火を上げて福山城に帰船を知らせ、箕島沖から福山座床迄水呑村の水先安内船が先達をする船役があった。

## 箕島の鎮守楠神社

江戸時代の楠神社は、楠明神又は加茂明神と記載され、創建は明らか

箕島楠神社

にされていないが、天和三年（一六八三）には、神田三畝歩が認められており、明和の終頃（一七七一）になると、二間四面の社殿があり、神主は甚左衛門（小畠）、禰宜は長和村の九太夫であった。また除地も増加し、社地二〇歩・神田三畝一〇歩・三林七反四畝十五歩であった。

以後、明治初年の頃になると栗ノ木谷に分霊が祀られ、その後、大正八・九年頃釜屋福禅寺西に続いて分霊を祀り、大正一一年になると地元南浦の氏神となる。

平成六年には、近代建築の立派な社殿が再建され、九月二九日には、遷宮祭が行われている。

五〇余年前、私が登校する際観てきた箕島は、芦田川の沖合に浮く巨鯨（南が頭部で茶山が尻尾）で瀬戸内海の旭日に向って力強く泳ぐ姿に似ている、と友達と話乍ら島を見ていると人生に対して希望のもてた島であった。

その巨鯨も、開発によって満身創痍の島にと形を変えているが、確実に周辺部の重工業都市化は進み、限りない発展が約束されている。